

QUESTION／POINT／KEYWORDS 集

序章 エピソードに学ぶ——困難な時代の子どもの学びと育ちの豊かさ

QUESTION

- 子どものエピソードにはどんな意味があるのでしょうか
- 教職科目の教育心理学ではどんな内容を学ぶのでしょうか
- 子どもの学びや育ちをよりよく理解し支援するにはどうすればよいのでしょうか

1章 思考の育ち——認知発達

QUESTION

- 子どもの思考の育ちとはなんですか
- 認知発達とカリキュラムはどのようにかかわっているのでしょうか
- 子どもの認知発達をどう支援促せばよいのでしょうか

POINT

- ☐ 1 知的な発達の代表的理論を構築したピアジェは、子どもの認知発達を「感覚運動期」「前操作期」「具体的操作期」「形式的操作期」の4段階から捉えました。スキーマ、同化と調節、中心化など、多くの認知発達の重要概念を提起し、その後の発達研究に大きな影響を与えています。
- ☐ 2 子どもは心に関する素朴概念である心の理論によって、相手の心を推測します。幼児期から児童期にかけて、一次的信念から二次的信念の獲得へと、より複雑な他者の心的状態の推測が可能になり、文章理解などさまざまな学習との関連も示唆されています。
- ☐ 3 「10歳（9歳）の壁」といわれるような時期には、認知発達も質的に変化し、自己や感情、友だち関係などの変化とも相まって、発達の節目を迎えます。子どもなりの考えや理解を尊重し、ときに停滞を示す子にも、大人が支援的にかかわることが重要です。

KEYWORDS

ピアジェ	スキーマ	同化	調節	感覚運動期	表象	対象の永続性	共
同注意	前操作期	ごっこ遊び	保存性	具体的操作期	形式的操作期		ヴ
ィゴツキー	社会構成主義	外言	内言	発達の最近接領域	足場かけ		心
の理論	素朴概念	誤信念課題	リテラシー	10歳の壁			

2章 喜怒哀楽の育ち——情動発達

QUESTION

- 喜怒哀楽にはどのような役割があるのでしょうか
- 喜怒哀楽への対応の仕方は、どのように発達していくのでしょうか
- 子どもが喜怒哀楽を安心して体験・表現するために、どんな支援ができるのでしょうか

POINT

- ☐ 1 喜怒哀楽（情動）は何らかの対処を求められる特定の状況（危機）におかれたときに生じ、自他に状況を知らせ、対応を求める役割を担っています。
- ☐ 2 喜怒哀楽への対応（情動調整）は、①基礎となる生体調節、②子どもと養育者との情動調整（インターアクション的調整）、③環境や周辺条件からの影響という3つの次元で整理でき、自身の身体と他者や環境との相互作用をもとにそのパターンが学習されていきます。
- ☐ 3 子どもは情動発達の途上にあるため、喜怒哀楽（情動）の認識、読み取り、言語化、調整という各段階での支援が、子どもの情動の体験と発達を支えます。

KEYWORDS

情動	感情	情動表出	一次的情動	二次的情動	社会的表示規則	情動調
整	愛着	ボウルビィ	内的作業モデル	エインズワース	情動伝染	感情
語	心の理論	情動知能	解離			

3章「わたし」の育ち——社会化と自己の発達

QUESTION

- 「わたし」はどう育つのでしょうか
- よりよい「わたし」の状態とはどのようなものなのでしょうか
- 「わたし」の発達をどのように支えたらよいのでしょうか

POINT

- ☐ 1 「わたし」の育ちは社会化と「わたしらしさ」の獲得（個性化）という2つの発達過程によって成り立っています。
- ☐ 2 「わたし」は、外的な適応（社会適応）と内的な適応（わたしらしさ）の両方が達成されているときにウェルビーイングの状態にあるといえます。
- ☐ 3 他者が内的、外的な適応状態を捉えてバランスをとれるようにしたり、自分自身で内的適応を守る力（セルフ・コンパッションなど）の獲得を支援したりすることが、「わたし」の育ちを支えます。

KEYWORDS

社会化 生態学モデル コミュニケーション 三項関係 社会的参照 心の理論 道徳的行動 向社会的行動 社会的領域理論 社会的情報処理モデル 心理社会的発達理論 アイデンティティ・ステイタス ウェルビーイング 個性化 自尊感情 セルフ・コンパッション

4章 学びの基礎——学習, 記憶, メタ認知

QUESTION

- 学習とはどのような段階を踏んで成立するのでしょうか
- 「メタ認知」とは何でしょうか
- 「頭のよさ」とはどのように捉えられるのでしょうか

POINT

- ☐ 1 学習の基礎には、条件づけのメカニズムや強化がかかわっています。学習することで、よい結果が得られたか、そしてその先行条件がどのようなものかという点が、行動論的な見方では重要です。
- ☐ 2 人の記憶は、短期と長期の2つの貯蔵庫があり、覚えた内容をしっかりと定着させるには、さまざまなリハーサルを用いて、短期記憶から長期記憶に転送することが必要です。
- ☐ 3 自分の学びを振り返り、見直す過程では、メタ認知が重要な役割を果たします。学習を俯瞰的にモニタリングすることや、その過程を逐次コントロールすることで、より効果的で高度な学習が可能になります。
- ☐ 4 いわゆる「頭のよさ」を表すには、知能指数単一の指標では十分ではなく、多重知能理論など、より多面的な知的能力の評価が注目されています。新たな能力としてのキー・コンピテンシーや社会情動的スキルでも、非認知的能力を重視する能力観へと変化しています。

KEYWORDS

古典的条件づけ オペラント条件づけ 記憶の二重貯蔵モデル 短期記憶 長期記憶 リハーサル メタ認知 メタ認知的モニタリング メタ認知的コントロール 知能指数 多重知能理論 キー・コンピテンシー 社会情動的スキル

5章 やる気がでるとき、でないとき——動機づけ

QUESTION

- 子どもがやる気になるのはどんなときでしょうか
- どうすれば教師は子どものやる気を引き出せるのでしょうか
- 「やる気がみられない子ども」にどう向き合えばよいのでしょうか

POINT

- ☐ 1 動機づけの考え方には、「興味」「自己効力感」「課題価値」「自己決定理論」「達成目標」などのさまざまな視点があります。
- ☐ 2 動機づけの難しさを踏まえ、目標設定ややりがいへの焦点化（自己効力感・課題価値）などを促し、結果だけに重きをおかず熟達を支援すること（熟達目標構造）が大切です。
- ☐ 3 教室の風土や雰囲気といった社会的環境も動機づけに重要な影響を与えます。授業の教材や指導案をどうするかといった短期的視点だけでなく、教師と子どもの関係づくりや子ども同士の関係性など、長期的視点に配慮したクラスづくりが動機づけを支えます。

KEYWORDS

興味 自己効力感 内発的動機づけ 自律性 自己決定理論 達成目標 熟達目標
達成目標 遂行目標 接近一回避次元 社会的目標 課題価値 再帰属訓練
増大的知能観 固定的知能観 自律性支援 動機づけの社会的伝達 教室の熟達目標構造
教室の社会的目標構造

6章 教え方, 学び方——学習指導

QUESTION

- 学力を育成する効果的な指導法にはどのようなものがあるのでしょうか
- その指導法は、なぜ効果があるといえるのでしょうか
- 子どもたちが主体的に学習を進められるようにするためには、どのように指導すればよいのでしょうか

POINT

- ☐ 1 知識の種類によってその獲得と保持の仕組みは異なります。また一人ひとりの子どもによって指導の効果は異なります。教師はさまざまな学習方法の特徴を理解したうえで、適切な方法を選択することが求められています。
- ☐ 2 子どもの誤答には意味があります。教師は子どもの誤答の背景を読み解き、適切に指導することが大切です。特に日常生活の経験から自然に獲得した素朴概念が誤っていた場合は、その修正が難しいことに注意が必要です。
- ☐ 3 子どもが主体的に学習を進めていけるように、教師は授業のなかで「子どもが、自分の学習を自己調整する力」を、段階的に育てることが必要です。

KEYWORDS

宣言的知識 手続き的知識 発見学習 有意味受容学習 先行オーガナイザー
プログラム学習 適性処遇交互作用 バグ 素朴概念 自己調整学習 循環的
段階モデル（予見段階・遂行段階・自己省察段階） 自己調整学習方略（認知的方略・
メタ認知的方略・リソース管理方略）

7章 学びの捉え方——教育評価

QUESTION

- 何のために評価して、評価したことをどう活用するのでしょうか
- 子どもたちの学びをどう捉え、どのように評価するのでしょうか
- 評価するための情報を、どうやって集めるのでしょうか

POINT

- 1 評価には、学習前のレディネスを把握する診断的評価、学習中の子どもの理解度や授業展開を評価する形成的評価、学習の最後に学力を総体として捉える総括的評価の3つの機能があります。
- 2 「目標に準拠した評価」「指導と評価の一体化」は、教師が具体的な到達目標を設定し、それを到達できるような指導を行い、その到達度を評価するという、授業における1本の軸（目標－指導－評価）を説明しています。
- 3 「学力」を評価するためには、テストや観察などさまざまな方法があります。評価の際には、採点者による偏りを防ぐために、ルーブリックなどを活用することが有効です。

KEYWORDS

診断的評価	レディネス	形成的評価	総括的評価	相対評価	個人内評価
到達度評価	到達目標	目標に準拠した評価	評価規準	評価基準	指導と評価の一体化
主体的に学習に取り組む態度	ポートフォリオ	真正の評価	ルーブリック		

8章 仲間との学びあい——協同学習

QUESTION

- 友だちと対話すると、理解を深めることができるのはなぜでしょうか
- 質の高い学びあいとは、どのようなものなのでしょうか
- 質の高い学びあいを成立させるためには何が必要なのでしょうか

POINT

- ☐ 1 他者との対話は、個人内思考を外化し、相互作用することで、個人の思考を整理したり深めたりすることに有効です。
- ☐ 2 教師は、学びあいを成立させる構成要素を理解し、目の前の子どもたちに合った支援（話しあいの構造化・グループの改善手続きなど）をする必要があります。
- ☐ 3 子どもたちが自らの学習を運営・進行する必要がある学びあいは、学力だけでなく、子どもたちの社会的側面を育成できる可能性があります。

KEYWORDS

相互作用 個人内思考の外化 フィードバック 対話 認知的葛藤 ジョンソン
 グループ学習 協同学習 相互教授法 読解方略 ピア・ラーニング
社会性 自己調整学習 共調整 社会的に共有された学習の調整

9章 仲間との関係——適応, 社会的学習, ソーシャルスキル

QUESTION

- 子どもの仲間関係は発達とともにどのように変化するのでしょうか
- 子どもは仲間関係にどのような影響を受けるのでしょうか
- 仲間関係をどのように支えたらよいのでしょうか

POINT

- ☐ 1 仲間関係は個人的なつながりと学級内のつながりから捉えられますが、発達とともに意味が変化し、内面的なつながりは難しさもはらんでいます。
- ☐ 2 子どもは仲間と過ごすなかで、行動や自己について学び変化していきますが、学びや変化の内容は自他にとってよいことばかりではありません。
- ☐ 3 仲間関係は対人的な認知・行動の学びから支えることができますが、同時に子どもの自分づくりを支援することも重要です。

KEYWORDS

仲間関係 学校適応 ソーシャルサポート 社会的学習 自己調整能力 モデリング
足場かけ 社会的比較 自尊感情 自己評価維持モデル 自己価値の
随伴領域 社会的スキル訓練 仲間関係能力 社会的コンピテンス

10 章 学びと育ちを支える教室——教師—子ども関係, 学級風土・学校文化

QUESTION

- 今日, “学校・教室で学ぶ” ことの意義とは何でしょうか
- 教師の期待は子どもにいかに関わり, どう影響するのでしょうか
- 教師の職務の専門性とは何でしょうか

POINT

- 1 グローバル化や ICT 化が進み, またパンデミックによる長期休校を経験した今日, 学校教育のあり方は変化しつつあります。オンラインでの授業や学習が可能となった現在, 学校に集まり, 対面で交流するという, 従来当然であった集団での学校教育の意義や役割が今後問われていくことでしょう。
- 2 教室の中で, 教師は子どもの態度や行動を踏まえ, 一定の期待や信念を形成し, それが子どもへのはたらきかけにも影響する可能性があります。教師期待効果とは, 教師がもつ期待が子どもとのコミュニケーションを経て学業達成に影響することをいいます。また教師はクラスの子どもを捉える認知的枠組みを有しており, それは学級経営にも影響することが示唆されています。
- 3 学級はそれぞれの個性をもった社会的な文脈であり, そこには独自の規範や風土が存在しています。自律的な学級風土・学級雰囲気のためには, 管理職が民主的なリーダーシップをもち, 教師が同僚性を高められ, 地域による適切なコミットメントがあることが重要です。

KEYWORDS

ピグマリオン効果 自己成就予言 教師期待効果 教師の認知的枠組み 勢力資源
反省的実践家 バーンアウト 学級風土 学校文化 自律的学級風土

11 章 子どもの困難の理解と支援——学校カウンセリング

QUESTION

- 子どもの示す困難（問題行動）にはどのようなものがあるでしょうか
- 子どもの示す困難をどう理解すればよいでしょうか
- 困難を示す子どもをどのように支援したらよいでしょうか

POINT

- ☐ 1 子どもの示す困難な状況は問題行動とよばれ、周囲の他者に困難が及ぶ外在化問題と、困難さを内面的に抱える内在化問題の2種類に大別されます。
- ☐ 2 子どもが示す状況は身体的な要因や社会的な要因から導かれたり維持されたりしている可能性もあり、理解にはシステムの視点が必要です。
- ☐ 3 子どもの困難を的確に理解し有効な支援を実現するためには、かかわっている教師らによる多視点の連携体制が不可欠です。

KEYWORDS

問題行動 外在化問題 内在化問題 教育相談 学校カウンセリング 生徒指導
心理教育的援助サービス 悪循環 システム的視点 生物・心理・社会モデル
不登校 校内連携体制

12 章 個のニーズに応じた学び——特別支援教育

QUESTION

- 学級における教育的ニーズにはどのようなものがあるでしょうか
- 個々の教育的ニーズはどのような方法で把握・理解できるでしょうか
- 特別な教育的ニーズをもつ子どもたちに対して、どのような支援ができるでしょうか

POINT

- ☐ 1 特別な教育的ニーズをもつ子どもに対しては、特別支援教育が実施されます。また、通常学級でも個々の教育的ニーズに応じた指導・支援が求められます。
- ☐ 2 子どもの教育的ニーズには共通性と連続性があり、特別な教育的ニーズをもつ子どもへの支援が、他の子どもたちにも支援的な場合があります。
- ☐ 3 子どもの個性や教育的ニーズを把握（アセスメント）し、よりよい指導・支援を実現するには、心理検査を（測定内容などの性質を理解したうえで）活用することや、複数の視点・尺度で多面的に理解しようとするのが重要です。

KEYWORDS

教育的ニーズ 特別支援教育 発達障害 二次障害 個別の指導計画 心理教育
教育的援助サービス アセスメント 個別の教育支援計画 チーム援助 IQ
知的障害 社会的適応 インクルーシブ教育 合理的配慮 学級づくり